

空飛ぶ車いす

井上夕香 著

現在の若者はコミュニケーションが下手であるといわれている。幼い時から、食事と一緒に摂る機会の少ない核家族で育ち、自分の個室でゲームやメールに熱中する生活では無理の無いことと思われる。人間同士の真の触れ合いが無く、人としての生き方を教えられていないので、孤独感・疎外感から無気力になったり、劣等感から問題行動を起こす若者が多いように感じる。

「技術は人也」の言葉の通り、工業高校の現場では技術教育を通して生徒たちに将来の生活について考えさせ、人は社会で一人だけでは生きていけないということを実感させるようにしているが、本著はそんな工業高校生の心を育てているボランティア活動「空飛ぶ車いす」を密着取材して、その活動内容を紹介した小中学生向けの童話である。

「空飛ぶ車いす」は国内で不要となった車椅子を工高生が修理し、必要としている国に贈るといった活動である。1991年（H3）栃木工業高校がタイで車椅子の修理活動をしたのが始まりで、1999年（H11）から飛行機で輸送することから「空飛ぶ車いす」と呼ばれるようになった。全国の工業高校に呼びかけ、現在の参加校は23都道府県59校ほどで、工業高校生が行っている一大プロジェクトである。

「空飛ぶ車いす」は「車椅子の提供者」、「修理する工業高校生」、「飛行機で提供国に運ぶ人」、「利用者に届ける人」と車椅子をバトンにした手渡しボランティアリレーであり、それぞれの部門でタッチした人たちにはそれぞれのド

ラマがある。本著では輸送ボランティアとしてベトナムに車椅子を届ける方の話から、この活動を支えている人達や現地の事情、車椅子を贈られた子供の喜びなどを紹介し、読んでいる者を感激させる。

本著では紹介されていないが、修理や現地に運ぶ人たちだけでなく、車椅子の提供者にもドラマがある。こんな例があったので紹介する。不要になった車椅子を有効利用してもらえないかと本校（大森学園高等学校）に連絡があり、車椅子を持ってご夫妻が訪ねて来られた。車椅子は子供用で、新品のように綺麗でリクライニングする立派なものである。この車椅子を使っていたお子さんが亡くなったので提供したいとのことである。生徒たちは点検しながらお子さんの思い出話を聞き、韓国の施設の子供なら丁寧に使ってもらえるのではと贈り先を計画したようである。帰られるときの母親の表情は、まるで子供と別れるような感じであった。生徒たちもそんな気持ちを感じたようで、いつも冗談を言いながら修理活動をしているのに言葉少なく、考え込みながら活動を続けた。近頃は韓国やスリランカを訪ね、持参した車椅子の贈呈や以前贈った車椅子のメンテナンスを行うという活動も行っているが、障害を持つ方たちに会い、その生活に触れることにより何かを感じ、工高生たちは人間的に成長するようである。又、現地の高校生や他の地方の工高生との交流は話題も豊富になり、更に成長を促している。

著者も感じたと思うが、「空飛ぶ車いす」は単に不要になった車椅子をリユースのために贈るのではなく、それぞれの部門に携わった人たちの心を贈っているのである。

（素朴社、157頁、1,200円＋税）（井上 皓司）